
バキューンポリス 古田マグナム

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

バキューンポリス 古田マグナム

【Nコード】

N7968B

【作者名】

【あらすじ】

殺人事件に立ち向かう刑事達。舞台は整い、いよいよ彼のシヨウタイムが始まる。

第1話：始動

九曲署捜査一課。ここで繰り広げられるのは事件と戦う男達の物語。

「それではこれから捜査会議をはじめる」

会議室で捜査一課長の谷が捜査員たちを見回す。憎むべき犯罪と戦う捜査一課の面々、ここにいるのは皆百戦錬磨のつわもの達だ。今回彼らに課せられたのは殺人事件を解決に導く事。

これまで様々な事件を解決してきた捜査員達。犯罪を憎む彼らは今回の事件においてもその能力をいかに発揮すべく会議に臨んでいた。

「……ということだ。何か意見はないか」

特に意見もないようなので、指示を出そうとした谷。しかしそこで一人の男がゆっくりと手をあげた。

だらしなく着込んだジャージ、ぼさぼさの頭、眼光鋭く虚空を見上げた瞳。

会議室の捜査一課の刑事達が見守る中、”彼”のシヨウタイムが始まる。

「ん、どうした古田」

「……意見……それはうつろいゆく幻……そう……それは終わらないダンス……さあ……踊ろう……夜が醒めるまで……」

「よし、それじゃあ時田と藤原は現場周辺の聞き込み、森本と須藤は凶器の方を当たってくれ、宮元は鑑識へ。あと古田は三丁目の田中さんの家のおばあさんが話し相手が欲しいそうだからそこ行ってくれ。では解散！」

「了解！」

それぞれが己の果たすべき役割を十分認識している捜査員達は、

課長の言葉にすばやく反応して散っていく。
彼らの手にかかれば、事件は遠からず解決するだろう。

第2話：轢殺

古田と新人の佐藤は車で証人の家へ向かっていた。

配属されたばかりの新人である佐藤は、やや興奮した面持ちでハンドルの握っていた。

「古田先輩、俺覆面パトカー運転するの初めてなんすよ。なんか緊張するっすね」

「……」

「早くサイレン鳴らしてそこの車蹴散らしていつてみたいっすねあれ？先輩どうしたんすか？」

「……」

古田は前方にある交差点近くの道路を、その鋭くも虚無をたたえた瞳で凝視していた。

「路上駐車……秩序に牙剥く鋼のフレーム……永遠……そして偽りの栄光……許されざる者……」

「あ、本当だ。でも交通課の仕事っすよ。俺らは聞き込みに行かないやいけないし」

「決まりきった世の中に……反抗を……そして……俺の前で……悪は……存在出来ない……たとえ……この命……尽きるとも……」

「時間も無いししょうがないっすよ。ここは交通課に任せて僕らは聞き込みっす」

「さあ……狩りの……時間だ」

「いやいや、それは無理っすよ先輩」

古田は佐藤の声を無視してドアに手をかけた。

「っつて先輩！走ってる車から降りるのは危な……先輩！先輩！……！……」

佐藤の声を背後に聞きながらドアを蹴り飛ばし迷うこと無く飛び出した古田。

格好良く道路に降り立とうとするが慣性の法則に従い豪快に倒れ

て繊細に転がりアスファルトを削り削られる古田。

さらにそこへたまたま通りかかった大きめのトラック三台が、その大きなタイヤを存分に發揮して古田。いい感じで全身まんべんなく古田。

絶体絶命。

第3話：執念

たまたま通りかかったトラック三台に連続して踏まれてしまった古田。

この凄まじい事故で大きなダメージを受けた古田。しかし彼は良くない方向に曲がった腕をありえない根性で真直ぐに直して拳銃を握り、路上駐車車の車めがけて実弾を何の遠慮もなく連続発射。全部はずれて余計な被害がいい感じに拡大した。

「せせせ先輩！ 何やってんすか！」

突然の古田ダイブに驚きつつも、冷静に車を路肩に止めた佐藤が血だらけの古田に駆け寄った。

「奴は……鋼……俺の銃を……弾を……弾き返す……鋼……残された手は……零距离射撃……」

「いや先輩！ 手が変な方向に曲がってるっすよ！ 今救急車呼びましたから動かないくださいっす！」

だが古田の目は路上駐車車の車から離れない。

「今こそ……復讐の時……援護を……」

「先輩！ 足も妙な方向に曲がってるっすよ！」

佐藤の声を無視して、古田は曲がる所が増えて駆動領域が無闇に拡大した足で立ち上がり、路上駐車車の車めがけて渾身のダツシュ。

「先輩！ ヤバイっすよ先輩ー！！」

佐藤の声を背後に聞きながら、獲物に向かって走る古田。手に握られた銃が狩りへの期待で、まるで火のように熱い。

後少して路上駐車車の車にたどり着くというところで、古田の足が当然のことながら限界を迎えた。

無理がたたって倒れた古田。その上を佐藤の通報により駆けつけた救急車がナチュラルに通過してミラクル古田。

絶体絶命。

第4話：人質

佐藤は入院している古田を見舞うため病院に向かっていた。

「先輩、あれで生きてるんだからすげえよなあ……」

佐藤は古田の生命力に感心しながら、お土産のまんじゅうを片手に病院の自動ドアをくぐった。

病院の受付では、全身包帯の古田が女性看護師を後から羽交い絞めにして頭に拳銃を突きつけている。

「せせせ先輩！ 何やってんすか！」

思わずお土産のまんじゅうを握りつぶした佐藤は古田に向かって叫んだ。

古田は佐藤を見ると斜め上約30度を見上げながら話した。

「ここは……死の匂いがする……懐かしい……ベトナムの臭い……」

「先輩……ベトナムで何かあったんすか？」

「ベトナム……そう……それは……去年借りたビデオで……筋肉が多い男が戦っていた……スタローン……万歳……」

「先輩それ映画じゃないっすか！ なんて看護師さんを人質にとってるんすか！ 全然わかんないっすよ！」

「ここは……生と死が……交差する場所……全ての命が……許しを乞う……しかし……飯が……まずい……」

「先輩！ 飯がまずいから人質とるってそっちの方がまずいっすよ！ とにかく落ち着いて、看護師さんを解放して拳銃をこっちに渡して……ってなんで拳銃もってるんすか！」

「この銃は……俺……もう一人の……俺……俺達は……常に……共にある……具体的にいうと……ロシアから……お手ごろ価格……十丁まとめて買うと……ポイント5倍……」

「先輩それ犯罪じゃないっすか！ もうとにかく落ち着いて、看護師さんを解放してください！」

古田はしばらく佐藤を見ていたが、ふっと息を吐くと羽交い絞め

にしていた看護師を解放した。

「先輩……」

「成長したな……さ……さ……さ……」

「佐藤っす」

「そう……佐藤……もう……おまえに……教える事は……ない……」

「いや、あの、見舞いに来たんすけど」

「さらばだ……佐藤……お互い……生きていれば……また……会う

事もあるだろう……」

古田はそれだけ言うと、しっかりと足取りで玄関に向かい、閉じたままの自動ドアに強引に衝突、さらにそのまま無理矢理突破。

きらきらと輝くガラスの破片をまとい、人々が呆然と見つめる中、己の信念を貫くようにどこまでも真直ぐ進み、病院前の道路で自らを玉に模したピンボールを披露して皆の度肝を抜いた。

絶体絶命。

第5話：再始動

九曲署会議室。事件もいよいよ解決に向けて大きく動き始める。

「それではこれから捜査会議をはじめる」

会議室で捜査一課長の谷が捜査員たちを見回す。憎むべき犯罪と戦う捜査一課の面々、ここにいるのは皆百戦錬磨のつわもの達だ。

「容疑者の目撃情報が複数寄せられている。捜査はここからが正念場だ、気を抜かないよう」

谷は泰然とした態度で捜査員達を見回す。威厳のある視線に捜査員達の背筋が自然と伸びる。

これまで様々な事件を解決してきた捜査員達。憎むべき犯人を追いつめつつある状況が彼らの士気を高めていた。

「……ということだ。何か意見はないか」

特に意見もないようなので、指示を出そうとした谷。しかしそこで一人の男がゆっくりと手をあげた。

全身まんべんなく覆う包帯、ギブスで固められた手足、包帯と金具の隙間から覗く暗い情熱をたたえた瞳。

会議室の捜査一課の刑事達が見守る中、”彼”のシヨウタイムが始まる。

「ん、どうした古田」

「……ほがむが……もがもががが……ふが……もがふがもふが……」

もが……もごもごふがふ……ほがほごふぐもぐ……」

「よし、それじゃあ時田と藤原は目撃情報のあった辺りの聞き込み、森本と須藤と宮元は潜伏場所と思われる場所の張り込み。あと佐藤、古田を病院に連れ戻してもう出さな。では解散！」

「了解！」

それぞれが己の果たすべき役割を十分認識している捜査員達は、

バキューンポリス 古田マグナム

課長の言葉にすばやく反応して散っていく。
事件解決はもう目の前だ。

第6話：突入

着々と捜査が進み、犯人の影を捉えようとしていたある日、九曲署に衝撃が走った。

「大変です！ 容疑者が人質をとって民家に立てこまりました！」
張り込みをしていた佐藤のミスで犯人に気付かれたのだ。

太陽が西に傾き、常世と現世があいまいになる時間。威信をかけた警察の車が犯人が立て籠もっている家の前に集合した。

「すす、すいませんッス！ 自分のせいでは……」

九曲署捜査一課長の谷の前で土下座しそうな勢いで頭を下げている佐藤。

「……反省も謝罪も後だ。今は目の前の状況に集中しろ」

眉間に深く皺を寄せた谷は佐藤の肩を軽く叩くと、夕日が沈み始めて薄暗くなった中、明かりの無い家の窓を凝視した。

二回の窓が突然開いた。周辺の空気が緊張に包まれる中、男と若い女性が姿をあらわす。男は若い女性の喉に包丁を突きつけていた。

「オラああ！ 近寄ったらこイツ刺すぞおお！」

血走った目と調子の外れた声。犯人はかなり興奮している。

谷は拡声器で犯人に向かって話し掛けた。

「落ち着いて聞いてくれ。我々は君に危害を加えるつもりは無い」
「うつるせえエ！ お前らどっカ行けよおおお！」

非常に危険な状態だった。時間をかけてじっくりと対話を続けるしかない、そう谷が判断した時、”彼”が現れた。

「籠城……一国一城……かりそめの主……古来より……援軍あつてこそ……籠城……いまのあいつは……行き止まりに向かって走る

……鼠……」

「古田！」

「先輩！」

両手足をギブスとボルトで固め、肌の殆どを包帯で隠し、消毒薬

の臭いを撒き散らしながら、松葉杖にもたれかかるようにやって来た古田。

”彼”のシヨウタイムが始まる。

「せせせ先輩、大丈夫っすか！」

「大丈夫だ……峠は……昨日……越えておいた」

「いやそれマズイっすよ！ すぐに病院に戻らないと」

「そうだ古田、怪我人にいられても邪魔なだけだ」

古田は佐藤と谷の顔を見た後、松葉杖から手を離れた。乾いた音を立てて松葉杖が地面に転がる。

「課長……拡声器を……自分が……突入して……説得……」

「しかし……」

「自分の……この姿を見れば……やつも……油断する……そこにチャンスが……千載一遇の……チャンス……これを逃せば……ポイント5倍……」

谷はしばらく古田の目を見ていた。佐藤が息を飲む中、谷は拡声器を古田に渡す。

「やるからには成功させる。そして生きて戻って来い」

拡声器を受け取った古田は、両手のギブスでそれをさむと、犯人が立て籠もった家に向かって歩き出そうと一歩踏み出した所、ギブスがパトカーにぶつかって直立不動の姿勢でそのまま前に倒れた。

「先輩！」

「大丈夫だ……これくらい……王蟲の群れに……跳ね飛ばされた時に……比べれば」

「先輩それアニメじゃないっすか！ やっぱり病院に戻った方が」

古田は佐藤の声を無視すると、再び立ち上がり犯人の待つ家へと歩き出した。

古田はギブスの両手で拡声器をはさむと口の前にもってきた。

「犯人……束の間の……フリーダム……だが……形あるもの……諸

行無常……働いても働いても……じつと手を見ても……いいじゃない……人間だもの」

古田の説得が拡声器を通して空間を満たしていく。二階の窓からは若い女性の喉元に包丁を突きつけた犯人が呆然とした表情で古田を見ていた。

古田は意味のよくわからない事を拡声器で増幅しながら、ゆっくりと引きずるような足取りで家の中へと入っていった。

第7話：日本の車窓から

犯人の立て籠もる家に松葉杖と拡声器を武器に乗り込んだ古田。いよいよ彼の戦いが始まる。

「先輩、大丈夫っすかねえ……」

佐藤が二階の窓を見上げながら呟く。

「信じる。あいつはやる時にはやる男だ」

佐藤の隣で、捜査一課長の谷が腕を組んだまま自分に言い聞かせるように言った。

静寂に包まれた現場。すでに古田が家の中に消えてから10分が経とうとしていた。

「ん……何か音がしなかったすか？」

最初に気付いたのは佐藤だった。犯人が立て籠もる家から、何か動くような音が聞こえる。現場はにわかに緊張に包まれた。

佐藤達が見守る中、二階の窓が開き古田が顔を出し、拡声器を構えてしゃべりだした。

「……隷属……愛の束縛……犬が西を向けば……尾もまた旅人……
智に働けば角が生え……情に棹させば窮屈……」

「先輩！ 意味がよく分かりません！ とりあえず状況を教えてください！
ださい！」

佐藤の言葉を聞いた古田は何かを思い出すような表情をして斜め上45度の方角を見つめた。

「……警察……人々の営みを……国家権力の名の元に……マッシブ
……諸君らに……告ぐ……抵抗を止めよ……」

「先輩！ 犯人はどうなつたんすか！」

「犯人……犯罪を……入りじめ……だが今は……我が同志……我々は……日本を変える……変えてみせる……」

「先輩！ 人質はどうなったんすか！」

「人質……人を……質に入れて……バツクレ……我々は……同志……我々三人で……日本を変える……まずは……おまえらを……」

佐藤が困りきった表情で谷の方を向いた。

「あの、すいません。自分には古田先輩が何を言っているのかよく分からないんですが」

「俺にも分からん」

谷はそれだけ言うと、予備の拡声器を口の前にもってきた。

「古田！ 状況を説明し」

谷の言葉が終わる前に、古田の横から若い男と若い女が現れた。

三人は眼下の警察に向かって元気よく叫び声をあげる。

「日本を変えるー！」

「我々に従えー！」

「……もはや……是非もない……かくなる上は……男もすなる……日記というものを……」

三人が警察に向かって唾を飛ばしながら声をあげる様子を見ていた谷は、眉間の皺を5、6本増やしなが隣にいる機動隊の隊長に話し掛けた。

「お願いします」

「突入！！」

力強い言葉と共に突入が開始された。

「日本を変えうわなにすやめ」

「我々に従ちよとなにするの」

「……いまこそ……天よ……我々に力痛い……そう……痛みこそ……生きている痛い……」

こうして事件は解決した。

だが犯罪と戦う男達に休息は無い。また新たな犯罪が彼らを待っている。

がんばれ古田。懲戒免職になるその日まで。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7968b/>

バキューンポリス 古田マグナム

2009年7月3日19時04分発行